

氷と後光

宮澤賢治

青空文庫

「ええ。」

雪と月あかりの中を、汽車はいっしんに走ってゐました。

赤い天鷲絨の頭巾をかぶったちひさな子が、毛布につつまれて窓の下の飴色の壁に上手にたてかけられ、まるで寢床に居るやうに、足をこつちにのばしてすやすやと睡つてゐます。

窓のガラスはすきとほり、外はがらんとして青く明るく見えました。

「まだ八時間あるよ。」

「ええ。」

若いお父さんは、その青白い時計をチョッキのポケットにはさ

んで靴をかたつと鳴らしました。

若いお母さんはまだこどもを見てゐました。こどもの頬は苹果りんごのやうにかがやき、苹果のほひは室いっばいでした。その匂は、けれども、あちこちの網棚の上のほんたうの苹果から出てゐたのです。實に苹果の蒸氣が室いっばいでした。

「ここどこでせう。」

「もう岩手縣だよ。」

「あの山の上に白く見えるの雲でせうか。」

「雲だらうな。しかし凍つてゐるだらうよ。」

「吹雪ぢやないんでせうか。」

「さうだな、あすこだけ風が吹いてるかも知れないな。けれども

風が山のパサパサした雪を飛ばせたのか、その風が水蒸氣をもつてゐて、あんな山の稜の一層つめたい處で雪になったのかわからないね。」

「さうね。」

月あかりの中にまっすぐに立った電信柱が、次々に何本も何本も走つて行き、けむりの影は黒く雪の上を滑りました。

車室の中はステイムで暖かく、わづかの乗客たちも大てい睡り、もう十二時を過ぎてゐました。

「今夜は外は寒いでせうか。」

「そんなぢやないだらう。けれども霽れてるからね。こんな雪の野原を歩いてゐて、今ごろこんな汽車の通るのに出あふと、ずる

ぶん羨しいやうななつかしいやうな變な氣がするもんだよ。」

「あなたそんなことあつて。」

「あるともさ。お前睡くないかい。」

「睡れせんわ。」

若いお父さんとお母さんとは、一緒にこどもを見ました。こどもは熟したやうに睡つてゐます。その唇はきちつと結ばれて鮭の色の谷か何かのやうに見え、少し鳶色がかつた髪の毛は、ぬれたやうになつて額に垂れてゐました。

「おい、あの子の口や齒はおまへに似てるよ。」

「眼はあなたそっくりですわ。」

山の雪が耿々と光り出しました。と思ふうちにいきなり汽車は

まっ白な雪の丘の間に入りました。月あかりの中に、たしかにかしはの木らしいものが、澤山枯れた葉をつけて立つてゐました。

そしてみんなはねむり、若いお父さんとお母さんもうとうとしました。山の中の小さな驛を素通りするたんびにがたつと横にゆれながら、汽車はいっしんにその七時^{ななしぐれ}雨の傾斜をのぼって行きました。そのまどろみの中から、二人はかはるがはる、やっぱり夢の中のやうに眼をあいて子供を見てゐました。苹果の蒸氣がいつぱいだったのです。電燈は青い環をつけたり碧孔雀になつて翅をひろげ子供の天蓋をつくつたりしました。

「ごごとごとごとごと、汽車はいっしんに走りました。

「おや、變に寒くなつたぞ。」

しばらくたつて若いお父さんは室の中を見まはしながら云ひました。電燈もまるでくらくらなつて、タングステンがやつと赤く熱つてゐるだけでした。

「まあ、ステイームが通らなくなつたんですわ。」

若いお母さんもびっくりしたやうに目をひらいて急いで子供を見ました。こどもはすっかりさつきを通りの姿勢ですやすやと睡つてゐます。

「どうしたんだらう。ああ寒い。風邪を引かせちゃ大へんだぜ。何時だらう。ほんのどろつとしただけだったか。」

時計の黒い針は、かつきりと夜中の四時を指し、窓のガラスはすっかり氷で曇つてゐました。

月が車室のちやうど天井にかかつてゐるらしく、窓の氷はただぼんやり青白いばかり、電燈は一そう暗くなりました。

「寒いねえ、もう一枚着せよう。」

「そんならわたしのコートやりますわ。」

「コートなんかぢや着ないも同じこつたよ。だまって起しておやり。却つて一ぺん起した方がいいよ。同んなじ姿勢でばかり居たんだから。」

「ええ。ですけど大丈夫ですわ。外套はお脱ぎにならなくてもいいのよ。」

若いお母さんは、窓ぎはから子供を抱いて立ちあがりました。

毛布は暖かいぬけがらになって残りました。こどもは抱かれたま

ま、やっぱりすやすや睡ってるます。

「まあ着せとけよ。どうせおれは着てなくたって寒くないんだから。」お父さんは立つて席の横に出て外套をぬぎながら云ひました。

「毛布の中へ包めばいいよ。そら。」

汽車は峠の頂上にかかったらしく、青い信號燈や何かがぼんやりと窓の外を過ぎ、こどもはまた窓のところ、前より少しうつむいて置かれました。深く息をしながらやっぱりすうすう寝てゐます。

たしかにそこは峠の頂上でした。にはかに汽車のあへぐやうな歩調がなくなり、速さは加はり、まっしぐらに傾斜を下って行く

らしいのでした。

間もなく電燈はさつと明るくなりステイームも通つて来て、暖かい空氣が窓の下の隅から紐のやうになつてのぼつて來ました。若いお父さんとお母さんとは安心して、またうとうと睡りました。外が冷えて來たらしく窓は湯氣が凍りついて白くなりました。そしてまた夢の合間あひまに、電燈はまばゆい蒼孔雀に變つて、紋のついた尾翹をぎらぎらにのぼし、そのおいしさうなこどもをたべたさうにしたり、大事さうにしたりしました。

ごとごとごとごと汽車は走つたのです。

そしていつか汽車はとまってゐました。

「盛岡、五分停車、盛岡、五分停車。」それからカラコロセメン

トの上をかける下駄の音、たしかにそれは明方でした。

（ふう、今朝ずるぶん冷えるな。）犬の毛皮を着たり黒いマントをかぶったりして八九人の人たちがどやどや車室に入って來ました。その人たちの頭巾やえり巻には氷がまっ白な毛のやうになつて結晶してゐて、ちよつと見ると山羊の毛でも飾りつけてあるやうでした。

いつか窓はすっかり白く明るくなりました。電燈も水のやうでした。

「夜が明けましたわね。」

「うん。すっかり睡っちゃった。」

「ここ、どこでせう。」

「盛岡だらう。もうぢき日が出るよ。ああすつかり睡つちやつた。」

窓はいちめん蘭か何かの葉の形をした氷の結晶で飾られてゐました。

汽車はたち、あちこちに朝の新らしい會話が起りました。

（へえ、けれどもみそさざいなら射てるでせう。）

（いいえ、みそさざいのやうな小さな鳥は彈丸で形も何もなくなります。）

窓の蘭の葉の形の結晶のすきまから、東のそらの琥珀が微かに透いて見えて來ました。

「七時ころでございませうか。」

「丁度七時だよ。もう七時間、なかなか長いねえ。」

子どもが眼をさまして舌を出しました。

「おお、いいよ。泣かないわね。ずるぶんねんねしましたね。さあお乳をあげますよ。ようつと。」お母さんは子どもを抱きました。

「そんなに舌を出してはばけてはいかん。」若いお父さんはトラックから楊子を出しながら云ひました。

窓は暗くなったり又明るくなったり汽車はごとごと走りましました。お父さんが洗面所から歸つて來ました。

俄かにさつと窓が黄金いろになりました。

「まあ、お日さまがお登りですわ。氷が北極光の形に見えますわ

」。

「極光か。この結晶はゼラチンで型をそつくりとれるよ。」

車室の中はほんたうに暖いのです。

（ここらでは汽車の中ぐらゐ立派な家はまあありやせんよ。）

（やあ全く。斯うまるで病院の手術室のやうに暖かにしてありますしね。）

窓の氷からかすかに青ぞらが透いて見えました。

「まあ、美しい。ほんたうに氷が飾り羽根のやうですわ。」

「うん奇麗だね。」

向ふの横の方の席に腰かけてゐた線路工夫は、しばらく自分の前のその氷を見てゐました。それから爪でこつこつ削こそげました。

それから息をかけました。そのすきとほった氷の穴から黝くろずんだ松林と薔薇色の雪とが見えました。

「さあ、又お座りね。」こどもは又窓の前の玉座に置かれました。小さな有平糖あるへいたうのやうな美しい赤と青のぶちの苹果を、お父さんはこどもに持たせました。

「あら、この子の頭のところで氷が後光のやうになつてますわ。」若いお母さんはそつと云ひました。若いお父さんはちよつとそつちを見て、それから少し泣くやうにわらひました。

「この子供が大きくなつてね、それからまつすぐに立ちあがつてあらゆる生物のために、無上菩提を求めらるなら、そのときは本當にその光がこの子に来るのだよ。それは私たちには何だかちよつ

とかなしいやうにも思はれるけれども、もちろんさう祈らなければならぬのだ。」

若いお母さんはだまって下を向いてゐました。

こどもは苹果を投げるやうにしてバアと云ひました。すつかりひるまになつたのです。

青空文庫情報

底本：「宮澤賢治全集第六卷」筑摩書房

1967（昭和42）年9月25日初版第1刷発行

入力：土屋隆

校正：阿部哲也

2012年8月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

氷と後光

宮澤賢治

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>